

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
- ◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

乳用牛

◇ 周産期病を防ぐ飼育管理

(1) 飼育環境

ア 泌乳期から乾乳期へ移行する際は、環境の急変を避ける。また、乾乳期中は、自由運動や日光浴ができる環境で飼育し、牛にストレスを与えない。

(2) 飼料給与

ア 乾乳直後から分娩予定日の3週間前までの乾乳前期は、第1胃の機能を維持するために、濃厚飼料給与量を1日当たり1～2kg程度とし、粗飼料を十分に与える。また、飼料用タンカル添加などによりカルシウム含量の高い飼料を給与することで、カルシウムの体内への蓄積を促す。

イ 分娩予定日の3週間前からの乾乳後期と呼ばれる時期は、分娩後に骨からのカルシウム動員が円滑に行われるようカルシウム剤の給与を中止する。濃厚飼料給与量は、上限を1日当たり4kgとして徐々に増やし、粗飼料は、良質なものを十分に与える。

ウ 分娩後は、飼料の急変を避け、粗飼料の食べ込みを確認しながら濃厚飼料を徐々に増やす。また、乾物摂取量の低下を招かないためにも、粗飼料は最も良質なものを与える。

(3) ボディコンディションスコア（BCS）及び体重

ア 泌乳後期は、BCSを3.25前後で維持するように努め、BCS3.75以上の過肥にしない。

イ 乾乳期中は母体の維持と胎児の発育のため、体重の増減がないよう適正な飼料給与に努める。

肉用牛

1 放牧牛の管理

(1) 放牧馴致を行うとともに、放牧に慣れていない牛は、肢蹄の病気やけがに注意する。子牛は、下痢や肺炎で急激に衰弱するため、早期発見や早期治療に努める。

(2) 初めて放牧する牛（子牛や外部導入牛）は、ピロプラズマ病に抵抗性がないので注意する。また、ピロプラズマ病はダニが媒介する病気なので、定期的に外部寄生虫駆除剤を使用する。

(3) 青草だけでは塩分やミネラルが不足し、栄養バランスが崩れるので、これらの不足を補うため、水飲み場などに鉱塩を置く。

2 子牛の放牧

- (1) 放牧子牛は、舎飼子牛に比べて運動量が多いため、肢蹄が鍛えられ、丈夫で健康に育つ。
- (2) 畜産研究所の試験結果によると、100日程度放牧した子牛は、その後の増体に優れ、肥育終了時には舎飼牛と差のない増体成績が得られている。このため、子牛の積極的な放牧に努める。
- (3) 草丈20～30 cmで放牧を開始し、滞牧日数は長くても1週間以内とする。

豚

◇ 繁殖豚の飼育管理

(1) 育成期間

- ア 体重約60 kgから母豚候補として育成を開始し、可能であればパドックでの運動により肢蹄を強化する。
- イ 授乳期間中の飼料の増給に対応できるよう、過肥に注意しながら育成する。また、群飼では、食いムラによる過肥や発育不良が出るため、頭数に見合った給餌スペースの確保と不断給餌が理想である。

(2) 交配前後

- ア 未経産豚への交配は、2回目以降の発情で生後8か月齢、体重130 kgを目安とする。
- イ 経産豚については、離乳当日は2 kg程度を給餌し、その後、発情回帰まで、授乳中の体力消耗程度に応じて飼料給与量を増やす。ただし、発情回帰が遅れている豚は過肥に注意しながら、飼料給与量を減らす。
- ウ 交配後4日間は、受精卵の損耗を防ぐために飼料の給与量を減らす。

(3) 妊娠期間

- ア 連産性を高めるため、BCSに注意する。初産から3産目の豚ではやせすぎに、4産目以降の豚では過肥に気を付けて栄養管理を行う。
- イ 基準体重に満たない初産豚や体力が回復しない経産豚には、妊娠前期に飼料の増給が必要となるが、過度な給与はしない。
- ウ 離乳時にやせすぎた豚には、妊娠中期から後期に飼料を多給し、目標とする分娩時体重を目指す。

(4) 授乳期間

エネルギー含量の高い授乳期用飼料を自由に摂取させ、離乳時の体重減少量を7 kg程度にとどめることにより、次回の発情回帰の遅延を防ぐ。

鶏

1 青森シャモロックの飼料給与

- (1) 初期発育を早め肉付きを良くするため、餌付けから 27 日齢までのひなには、青森シャモロック用前期飼料または下表に示すタンパク質割合やエネルギーレベルの肉用鶏専用配合飼料を給与する。
- (2) 28 日齢以降は、過剰な脂肪付着を防ぐため、青森シャモロック用後期用飼料又は下表に示すタンパク質割合やエネルギーレベルの肉用鶏専用配合飼料を給与する。
- (3) 出荷 2 週間前（雌雄同群飼いの場合は 85 日齢以降）から飼料にニンニク粉末を 0.3% 添加して給与する。

表 青森シャモロックの飼料給与法

給与期間	給与飼料
餌付け～27 日齢	肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの） タンパク質 20%以上、代謝エネルギー3,000kcal 以上の
28 日齢～出荷	肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの） タンパク質 16%以上、代謝エネルギー2,900kcal 以上の
出荷前 2 週間	ニンニク粉末*を 0.3%添加

※商品名「フジガーリック A」

2 青森シャモロックの衛生管理

- (1) 青森シャモロックの衛生対策は、「飼育管理マニュアル（平成 23 年 5 月版）」や農林水産省の「飼養衛生管理基準」に沿って実施する。
特に伝染性疾病予防のため次のことに心掛ける。
 - ア 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒の徹底に努める。
 - イ 病気を鶏舎内に持ち込まないようにするために、鶏舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
 - ウ 鶏舎への野生動物の進入防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
 - エ 異常鶏の早期発見に努めるとともに、異常鶏を発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

草地・飼料作物

1 良質粗飼料の調製

- (1) 牧草の刈取りは、出穂始期から出穂期に行い、遅くとも開花始期までに終わる。
- (2) 1 番草の収穫時期は好天が長続きしないので、サイレージ調製を基本とし、全ての草地を刈取適期に収穫できるように計画的に作業を進める。
- (3) ロールベールサイレージを調製する場合は、原料草水分が 60%以下の状態で梱包し、その日のうちに密封する。ストレッチフィルムは通常の場合、2 回転巻き（4 層）と

するが、夏を超えて給与する場合や多段積みで貯蔵を行う場合は3回転巻き（6層）にして気密性を高める。

- (4) 乾草調製は、4～5日間の連続した晴天日が見込める場合に実施し、気象情報に十分注意しながら、雨が予想される場合は、早めにサイレージ調製に切り替える。
- (5) ロールベール乾草は、水分が高いと貯蔵中の発熱やカビの発生により品質の低下を招くほか、極端な場合は発火することもあるので、水分18%以下で梱包する。やむを得ず水分が高い状態で梱包した場合は、速やかにストレッチフィルムで密封して発熱やカビの発生を防ぐ。

2 1 番草収穫後の追肥及び牛尿の利用

- (1) 収穫後は、速やかに追肥を行うことにより2番草の再生を促し、収量の確保に努める。
- (2) 窒素施肥量は、オーチャードグラス主体経年草地で10アール当たり5～6kg、利用初年目草地やチモシー主体草地では3～4kgとする。
- (3) 草地飼料作物への牛尿の利用
 - ア 牛尿中の肥料成分の把握

牛尿に含まれるカリ及び窒素の化学肥料代替量は、電気伝導度値を測定することにより推定できるので、下表を参考に施肥基準に応じた牛尿施用量を設定する。

表1 電気伝導度値（EC）による牛尿現物1t（1m³）中の化学肥料代替量（kg）推定値

成分	EC（mS/cm、25℃補正值）									
	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
窒素	0.27	0.43	0.65	0.95	1.31	1.74	2.25	2.82	3.47	4.18
カリ	1.11	1.73	2.34	2.96	3.58	4.20	4.81	5.43	6.05	6.67

イ 草地に対する施用法

草地へのカリ施肥量は窒素量の2/3を基準としているが、牛尿は窒素よりカリを多く含むので、牛尿の施用はカリ成分基準施用量を満たす量にとどめ、不足する窒素及びリン酸成分は単肥やNP肥料を用いて補給し、成分のバランスを保つ。

ウ サイレージ用とうもろこしに対する施用法

窒素成分で10kg/10a相当を上限として全面散布する。カリは無施用とし、リン酸は基準量を施用する。

3 サイレージ用とうもろこし畑の雑草防除

農作物病害虫防除指針に基づき、優占雑草の種類に応じて表3と表4に示す除草剤により雑草防除を行う。不耕起播種等により雑草が生育しているほ場にとうもろこしを播種する場合は、表2に示す除草剤をとうもろこし出芽前までに散布する。

表2 サイレージ用とうもろこしの雑草茎葉処理剤の使用法

除草剤名	対象雑草	10 a 当たり使用量
		通常散布
ラウンドアップ	1年生及び	400～500 ml/水 50～100 L
マックスロード	多年生雑草	少量散布
		400～500 ml/水 25～50 L

注) 使用時期は出芽前までとする。

表3 サイレージ用とうもろこしの土壌処理剤の使用法

除草剤名	対象雑草	10 a 当たり使用量
ゲザプリムフロアブル	1年生雑草	100～200 ml/水 100 L
ラッソー乳剤	1年生雑草	300 ml/水 100 L
ゲザノンフロアブル	1年生雑草	300 ml/水 100 L
デュアール乳剤	1年生雑草	300 ml/水 100 L
エコトップ乳剤	1年生雑草	500～600 ml/水 100 L
エコトップP乳剤	1年生雑草	400～600 ml/水 100 L
クリアターン乳剤	1年生雑草	500～800 ml/水 100 L
ゴーゴーサン乳剤	1年生雑草	200～300 ml/水 100 L
ゲザノンゴールド	1年生雑草	140～260 ml/水 70～100 L
デュアールゴールド	1年生雑草	70～130 ml/水 70～100 L
ラクサー乳剤	1年生雑草	400～600 ml/水 100 L
モーティブ乳剤	1年生雑草	200～400 ml/水 100 L
ボクサー	1年生雑草	400～500 ml/水 100 L
フィールドスターP乳剤	1年生雑草	75～120 ml/水 100 L

注) 使用時期は、モーティブ乳剤は播種後～とうもろこし2葉期（イネ科雑草2葉期まで）、その他の除草剤は播種後出芽前（雑草発生前）である。

表4 サイレージ用とうもろこしの茎葉処理剤の使用法

除草剤名	対象雑草	10 a 当たり使用量	使用時期
ゲザプリムフロアブル	1年生雑草	100～200 ml/水 100 L	とうもろこし2～4葉期
ゲザノンフロアブル	1年生雑草	300 ml/水 100 L	とうもろこし2～4葉期
ワンホープ乳剤	1年生雑草及び 多年生イネ科雑草	100～150 ml/水 100 L	とうもろこし3～5葉期
シャドー水和剤	1年生雑草及び 多年生広葉雑草	50～75 g/水 100 L	1年生雑草及び 多年生広葉雑草2～5葉期 (とうもろこし3～5葉期)
バサグラン液剤 (ナトリウム塩)	1年生雑草 但しイネ科を除く	100～150 ml/水 100 L	とうもろこし生育期 (雑草の3～6葉期 但し、収穫50日前まで)
ゲザノンゴールド	1年生雑草	140～260 ml/水 70～100 L	とうもろこし2～4葉期
ハーモニー75DF水和剤	ギシギシ類	2 g/水 100 L	とうもろこし2～4葉期
ベルベカット乳剤	イチビ	5～10 ml/水 100 L (イチビ3～5葉期) 10 ml/水 100 L (イチビ5～8葉期)	イチビ3～8葉期 (とうもろこし4葉期以降 但し、播種後45日まで)
アルファード液剤	1年生雑草	100～150 ml/水 100～150 L 150 ml/水 100～150 L	とうもろこし3～5葉期 但し収穫45日前まで とうもろこし6～7葉期 但し収穫45日前まで

注1) ゲザプリムフロアブル、ゲザノンフロアブル、ゲザノンゴールドを土壌処理剤として使用した場合は、同剤は茎葉処理剤としては使用できない。

注2) デュアール乳剤またはデュアールゴールドとゲザノンフロアブルまたはゲザノンゴールドを組み合わせた体系処理は避ける。

※ 農薬使用の際は必ず最新の「農薬登録」を確認すること。